

# 一心寺かわら版

第三十二号 平成二十六年九月発行

ホームページ (<http://www.jimyouzan-isshinji.com>)

## 前任職の葬儀を終えて



五月一日、前任職、父・修道が人生を終えました。生前のご厚情並びに葬儀に際しましてのご芳志に厚く御礼申し上げます。父は、昭和十一年に一心寺に生まれました。幼い頃からお経を読み、五歳で導師を勤めていたそうです。また、足が悪かった祖父を自転車ですって行ったり、お遣いにしたりと日々お寺の手伝いをしていました。父は早くに跡取りと決まったようで、観一を卒業して龍谷大学に進学します。僧侶として仏教・浄土真宗を学ぶ傍ら卓球部に所属、関西大学リーグで優勝したことを誇らしげに語っていました。

そして昭和三十六年頃、一心寺へ帰ってきます。間もなく祖父に代わって住職となり、平成十四年三月まで勤めました。住職退任後も法務に携わっていました。二十四年夏に肺気腫と診断され酸素ボンベを持つての生活になりました。それでもお寺の行事には顔を出し、車で買い物に出るなど、まだまだ元気だと思っていました。しかし五月一日、突然倒れてそのまま人生を終えました。多くの方が、「院主さんはええ人生やったで。したいことをして、好きなお酒を飲んで。寝たきりになるのは好かんかったやろ」と慰めてくださいます。私もそう思いつつも、やはり強引にでも入院させていけばもう少し長生きできたろうに、という悔いもあります。しかし、度々「わしはええ時代に生まれた、一心寺に生まれて

良かった」と言っていたことを思い出します。良い時代に、ここに生まれて良かったと言えるということは、良き人々に囲まれて素晴らしい、往生浄土の人生を送れたということでしょう。父にとつての良き人とは、ご縁の深かった皆様方です。長きにわたりお世話になり、本当に有難うございました。

また、この度の葬儀では、総代、世話人、門信徒、自治会、寺院の方々のお力添えによって滞りなく、また賑やかに勤めることができました。重ねて御礼申し上げます。前任職という大きな存在が欠け、十分なことができないかもしませませんが、仏さまに見守られつつ残ります家族で精いっぱい一心寺を護っていきたいと思いますので、今後ともご助力賜ります様お願い申し上げます。

南無阿弥陀仏  
(お香典が一つ尊名不詳で失礼しております。お心当たりの方はお申し出いただけましたら幸いです。)

## 真宗興正派西讃教区仏教講演会報告



五月十九日、丸亀市民会館にて仏教講演会が開催されました。講師は長倉伯博氏(本願寺派善福寺住職・国立鹿児島医療センター「緩和ケア委員」、演題は「ベッドサイドに仏教がある風景」病める方とご家族と共にく」です。多くの末期患者さんに寄り添った経験をお話しくれました。

病める人に対してはこちらが語るのではなく、聞かせていただくかなければならない。人はそれぞれ物語を持っている、しかし、辛いことはなかなか話せない。まず長い沈黙の時を経て、私の話をち



やんと聞いてくれるという信頼を得ることが第一歩。「何が一番つらいの」と聞けるようになり、「よくぞ辛い事を話して下さいました」と共感するところに関係が深まっていく。そして患者さんにとってゴミ箱になることが大事で、心の中に溜っていき悩み苦しむ(仏教でいえば四苦八苦)を吐き出したところから、本当の自らの思い、願いが現れてくる。そこで何かしら手助けすることができるよう努めていくことができれば良いと聞かせていただきました。

長倉先生が寄り添った方々の物語を通して、病の中でのいのちに向き合うことの大変さと大切さを教えられました。私たちも病める方やその家族と接する機会があります。また私の家族も私もある立場になることでしよう。その時にどのように接したらよいのか、どうしたいのかを考えるご縁となったことです。

### 春季永代経報告

三月二十四日春季永代経が勤まりました。法話は赤松円心師(東かがわ市・正行寺)。

南無阿弥陀仏は阿弥陀さまからの呼び声である。病院で治療の順番が来たとき、終わって帰るときに〇〇さんと名前を呼ばれる。



それは私の病気をよくする術が、薬ができたから呼んでくださる。お念仏もそれと同じで私を救う手立てが整って呼んでくださっている。あなたを必ず救うはたらきがあることを知らせる呼び声。それに「はくい」||「南無阿弥陀仏」とそのまま受け取り答える。東日本大震災で南三陸町役場の三浦さんと南さんは迫り来る津波の中、みんなに助かってほしいという一念から自らのことを差し置いて避難を呼びかけ続けた。阿弥陀さまもそれと同じ。苦しんでいる私のことをそれほどに呼び続けておられることに気付けばお念仏申さずにおれない、と聞かせていただきました。

### 佐世保女子高生殺害事件くなぜ殺してはいけないのかく

七月二十六日に長崎県佐世保市でそれは起こりました。被害者は公立高校に通う女子生徒。加害者は同級生の女子生徒でした。

「誰でも良かった。人を殺して解体してみたかった」などと供述しており、二人の間の具体的なトラブル、動機は不明です。加害者には以前から問題行動があり人を殺しかねないという予兆があっただけに、未然に防ぐことができなかったことが残念でなりません。この痛ましい事件はなぜ起こったのでしょうか。母親の死、父親の再婚など生活環境の変化が原因、以前からの問題を指摘する見解など様々に議論されていますが、一つのことには特定することなどできようもありません。このような事件が起こる度に、ある少年の問い「なぜ人を殺してはいけないんですか」が頭をもたげます。

この問いについて、哲学者・森岡正博氏と宗教学者・山折哲雄氏との対談、その他、何人かの応答を見てみます。



山折氏・仏教には十戒という戒律があって、その冒頭に出てくるのが「不殺生」…(中略)…「殺すな」は、刑法的な思想として出てきた。…しかしながら現実の人間はどうでしょうか。自ら生き永らえるために毎日、動物を植物を殺し、生きとし生けるものを殺し、それを食することで生命を保っている。…「殺してはいけない」ということを、本当の意味では実践し切れぬことを知ってはいいても、そう言い続ける。…「殺してはならない」ということは、神とか仏といった、人間を超越する「法」があつて、はじめて言うことができた。偽善であるということを十分承知した上で、そう言い続けることができたわけです。…それが近代になると、超越的なもの

のはすべて排除されてしまう。…こうして「殺すな」は超越性を失ってしまい、我々にとつては偽善に満ちたものとなってしまふ。



森岡氏…「自分はあなたを殺そうとは思わないし、あなたも私を殺してはいけない」と言うと思う。…きつとその少年からはさらに、「なぜ？」と訊かれると思うんですよ。そしたら私は、「この世界に生まれ落ちて、ここまで生きてきた私は、この一度きりの人生を生き切ろうとしていて、それを今、こういう形で終わらせたくない。

だから、あなたが私のことを殺すのは許せない。それと同じことが、あなたに対しても言えると思う。あなたも今、他の誰でもなくあなたとして生まれてきて、一回限りの人生を生きていて、こうして今、私の目の前にいる。それが私によって殺されてしまっても、いいんですか？」といった対話をしていくしかないと思う。

山折氏…親鸞は、「殺すまいと思つても、一人でも千人でも殺してしまうことがあるのだ」と言っている。人間はそういう、論理的に説明することのできない「業」を抱えている。僕がもし少年と対面したなら、「君もそういう業から逃れ得ているとはとても思えない。君も僕も、気がついたら人を傷つけ、殺してしまうかもしれない」…、そういう話からまず始めると思う。…昔から「人を殺してはいけない」ということを、多くの人が言い続けてきたわけです。これは一年、二年でどうにかなるような話じゃない。何千年という時間をかけて言い続けてきてなお、解決できていない問題であるわけです。少年に対して、そういうコメントを付け加えなければなるまいとも思う。

森岡氏…その場合、大切なのは、「なぜ人を殺してはいけないのですか？」と問われた時に、自分もまたよく分からないということをごまかしたりせずに、はつきりと示すことだと思うんです。…「あ

なたが発した問いは、あなた自身は気づいていないかもしれないけれども、この偽善に満ちた社会において本当に生きるとはどういうことかという問いかけになっている。だから私はそれに応答したいし、ともに考えて行きたい」と呼びかけると思う。

(『救いとは何か』森岡正博・山折哲雄、筑摩選書)



作家・野坂昭如氏(故人)…人を殺してはいけないなど、とてもぼくにはいえない。ただ「ぼく」を殺してはいけない。そして、ぼくを殺そうとする人間に対しては、ためらわずに殺す。…殺されるのはいつも他人。…かの少年の質問には、あっさり、「殺しなさい。ただ君も殺される」と答えりやい、その仕組みを作れば済む。僧侶・瀬戸内寂聴氏…仏教の原始経典『ダンマパダ』に、「人はすべて暴力におびえる。すべての者にとつて生命は愛しい。わが身にひきあてて殺してはならない。殺させてはならない」。…釈尊は、「わが身にひきあてて」と、人をさとしてい。自分に痛いことは他者にも痛いのである。自分に不快なことは他者もまた不快なのである。自分にしてほしくないことを他者にしてはならない。こんな当り前の道理がわからないなら人間ではない。もし、子供がなぜ人を殺してはいけないのかと聞けば、「おまえは人間だから」と答えるべきである。

(以上、『文藝春秋』二〇〇〇・十一月号)

解剖学者・養老猛氏…「そんなもの、殺したら二度と作れねえよ」…「無闇に壊したら取り返しがつかないでしょう」ということなのです。…他人という取り返しをつかないシステムを壊すというこ



とは、実はとりもなおさず自分も所属しているシステムの周辺を壊しているということなのです。「他人ならば壊してもいい」と身勝手な勘違いをする人は、どこかで自分が自然というシステムの一部とは別物である、と考えているのです。

（『死の壁』養老猛、新潮新書）

目についた意見をあげましたが、大きく四つに分けられそうです。一、刑法で禁止されているから。二、自分が殺されたくないならば殺すな。三、いのちはかけがえがなく殺したら取り返しがつかないから。四、人間を超える神仏によつて説かれているから。

私ならどう答えるでしょうか。もちろん正解など分かりませんが、親鸞聖人のおっしゃるようによつて人を殺してしまふかもしれない身ですから偉そうなことは言えません。しかし「殺してはいけない」ということを子供に伝えたい。

まずは「殺してはいけない」とただただ抱きしめます。いのちの温もりが伝わることが一番でしょう。

ことばで語るなら、瀬戸内氏と同じくお釈迦さまのことばに頼ります。しかし、自分がされて嫌なことは人にしてはならないという説明は、通じにくくなってきているという声もあります。それは、今の子供たちは、自分が死ぬことなどありえないと考え、想像力が欠けているからだと言われます。

またこれは、「自分は殺されてもいい」と言う人には通じません。そういう時には養老氏のように答えます。これも仏教の考えですが、「あなたは自身は殺されてもいいと思っているかもしれないが、あなたはかけがえのない存在である。大切に思っている方がいて、あなたが死ねば悲しみ、影響を受ける。私もあなたに死んでほしくない。あなたが誰かを殺せば悲しむ人がおり、あなたも影響を受け

る。すべてのいのちはつながっており、そういう関係である。だから殺してはいけない。」

それでも、「そんな人もいないし、つながりもない」と言われるかもしれません。しかし、それでも「仏さまがいる」と言いたいと思います。「あなたのことを救いたいと思いつけている阿弥陀さまがいる。私たちにこの世の真実は分からない、けれども真実を覚つた仏さまが殺してはいけないとおっしゃっている。だから一緒に考えていこう。この世は縁によつて変わっていく、あなたの今の思いも苦しきも変わっていくのだよ」と。

このような事件は度々起こりますが、現在、日本における殺人事件被害者数は統計開始以来最も少なく、世界で最も少ない部類だそうです。ただ動機わからない事件が増えているようで不安を掻き立てるのでしょうか。この文章を書いている途中、女子小学生友人二人が飛び降り自殺をしたニュースが飛び込んできました。受験勉強が大変で疲れたのが理由だと言われていますが、彼女たちに何が起こっているのでしょうか。最後にもう一文。



表現教育者・宮川俊彦氏（故人）：「人を殺してもいいじゃない」、「したい事をしてなんでいけないの」という問いかけに、大人はどう答えていくか。「こういう問いかけをする事はとても大切です。客観視できる人間はすぐには行動に移りませんから。子供たちは深い部分で秩序を求めている。哲学を求めていると僕は感じます。

対する社会が単にこれはいけないことだというだけでは押さえきれないと感じます。子供たちに生の実感、展望をもって生きていく指針、自分が自分であつてよいのだという安心感を与えることが出来るか否かだと思います。

（『日本の危機』櫻井よし子、新潮文庫）